



まつばやし ゆう すけ
松林 佑典 さん
陶芸家・朝日焼十六世

伝統を武器に現代へ挑む

「カッコいい伝統工芸」を目指して

茶道具の焼物として400年の歴史を重ねる朝日焼十五世の長男にして、その伝統的な技を現代の生活や異文化の中に生かす試みにも挑む松林さん。宇治の窯元でお話を伺いました。

海外のクリエイターとのコラボで日本の文化を発信する

朝日焼とはどんな焼物ですか？

松林 茶どころ宇治の焼物として、約400年前から抹茶茶碗などの茶道具を作っていました。鹿背と呼ばれる、鹿の背の中のような斑点が特徴です。約1500年前に煎茶が流行してからは、磁器の煎茶器も作るようになりました。一つの登り窯で、陶器と磁器の両方を同時に焼くという大変珍しい焼物です。現在、父が十五代目の当主で、私は十六代目を継承する予定です。

子どもの頃から、窯元の跡継ぎということを意識しておられましたか？

松林 大学生の頃までは深く考えていませんでしたが、卒業を前に自分を見つめなおした時、このままなんとなく家を継ぎ、狭い世界しか知らずに生きていくのはいやだと思いました。一度海外に出て違う視点を持つてみたかった。帰国子女の友人が多かったことも影響しているかもしれません。それで、海外勤務ができる企業に就職したんです。しかし海外へ行くチャンスはなかなか訪れませんでした。一生この仕事を続けるかどうか、将来についても一度考えた時、ようやく

自分に課せられたものを受け入れようと決心ができました。その後、職業訓練校でろくろの技術を学んで、今では父と共に朝日焼の作家として活動しています。

現在どのような作品を制作しておられますか。

松林 父が茶道関係の作品を作っていましたので、私は比較的自由にいろいろなことをやらせてもらっています。特に力を入れているのが「GONZ」というプロジェクト。京都の伝統工芸の担い手が、歴史への敬意を持ちながら、その技術と素材を国内外のクリエイターに提供することによって、新しいなかに生み出していくという試みです。現在、西陣織・竹工芸・木工芸・茶筒・金網・陶芸の制作に携わる6人のメンバーが、それぞれの分野で新しいことに取り組んでいます。

取り組みの例を教えてください。

松林 私は、デンマーク人デザイナーとのコラボレーションによって、ヨーロッパで日常的に使える朝日焼の器シリーズを制作し、好評を博しました。手回しろくろ特有のやわらかいラインや美しい発色といった朝日焼の特徴が、デンマーク人の視点で新しくとらえ直され、ヨーロッパでの生活に溶け込むような作品となっていくのはとても面白い経験でした。

世界のどこにでもお茶の文化はあります。異文化の中で使えるお茶の器を提案することで日本の文化を発信していきたい。そう口にしていてとチャンスはやってくるもので、たとえば、イギリスの紅茶店で作陶し、お茶を点てるイベント、台湾でのワークショップ、ミラノやパリでの展示会なども決まっています。考えていたことが少しずつ形になってきたような手ごたえがあり、本当に楽しいです。「海外へ出たい」という願いがかないましたね。

松林 日本語で「お茶の時間」と言えば、本来は、ゆったりひと休みする時間を持つということ。その時間をより豊かにしてくれるのが、急須で美しくいれたお茶だと思えます。昔の日本の家には茶の間があり、そこに茶櫃がありました。今も旅館などで見かけるでしょう。蓋をひっくり返すとお盆になる、茶器の入った丸い容器です。時代と共に茶の間のある家は少なくなりましたが、器を作る人間としては、日常にお茶の器がある生活を提案したいのです。そこで、リビングルームのテーブルなどに、美しく、違和感なく置いておくことができ、さつと器と茶筒を取り出してお茶がいれられる、現代の茶櫃のような「器箱」というセットを考案しました。「GONZ」の仲間とのコラボレーションです。このようなもの世の中に提案することによって、マンシヨンのリビングに新しい「茶の間」を作ってもらえたらと願っています。

私には、お茶のある生活、お茶の文化を、

現代の日本に、そして海外に、しっかりと伝えていきたいのです。これからも、さまざまな方向からアプローチしていきたいと考えています。

朝日焼十六代を継承することについてはどのようにとらえておられますか。

リビングルームに「現代の茶の間」を

日本では、ペットボトルのお茶の普及によって、自分でお茶をいれることが少なくなっています。

松林 400年の伝統は大切にしなければならぬと思いますが、使う人にとつては、どんな窯の、誰の作品であれ、目の前の器が良いか悪いかは全てです。満足してもらえれば作品を作るといふ目標はどんな立場であっても変わらないと思います。

一方で、伝統ある窯元だからこそのだけのチャンスがあるのも事実です。私の曾祖父の弟は、英国の陶芸家バーナー・リーチの窯を作った人物です。今度、その窯で作品を作ることが決まりました。一カ月間、イギリスで作陶をし、展示会も行います。このようなご縁を感じると同時に大きな責任も感じています。

人生は駅伝のようなものではないかとよく考えます。次の世代が仕事をするために、自分はどうしたらいいかということとは常に意識していきたいですね。目標にしているのは「憧れられる仕事」。伝統工芸というと、暗い場所で背中を丸めて仕事をしているイメージで、まだまだ魅力的ではないと思うんです。若い人に「職人になって、海外に向けてものづくりをしたい」と夢を描いてもらえるような、クリエイティブで、カッコいい伝統工芸を目指していきたいと考えています。

(2014年12月4日)



いわもと りな さん
岩元里奈さん
メディアオフィサー

サッカーの世界大会で活躍

広報界の 日本代表に

昨年6月に開催されたFIFAワールドカップブラジル大会で、会場の報道対応にあたるメディアオフィサーとして日本人でただ一人起用された、スポーツ広報のプロ。世界を舞台に、さらなる飛躍を目指している

あらゆる場面を想定して準備することが大切

「仕事の内容を教えてください。」
岩元 サッカーを中心としたスポーツの広報の仕事で、フリーランスとして請け負っています。たとえばFIFA国際サッカー連盟からオフアワーを受けて、FIFA主催の大会へ行く場合、試合会場のメディアセンター施設の準備、取材エリアでの仕切り、記者会見の司会など、世界中から訪れる記者がスムーズに取材できるように運営することが主な仕事になります。

「昨年のFIFAワールドカップブラジル大会でも、メディアオフィサーとして現地で活躍されたそうですね。」

岩元 私は、日本対コロンビアの試合等が行われたクイアバの会場を担当しました。FIFAメディアオフィサーとしてワールドカップに関わるのは初めてのことで、これまでに経験した世界大会とはメディアの数も注目度も桁違いでした。

大切な仕事の一つに、大挙して訪れる記者一人ひとりに記者席を割り合せて、記者会見場やミックスゾーン（取材エリア）への入場券の配布可否を国や媒体などを勘案して決める、というものがありません。ピッチ上で撮影するフォトグラファーに

についても同様に座席割り合での優先順を決定します。これらの作業には知識と経験が必要とされ、全てを適切に、ミスなく行うことよって、当日のスムーズな人の流れはもちろん、例えばフォトグラファーがきれいに並んで撮影している、整然としたピッチを作るのも私たちの任務です。その整然とした美しく素晴らしい雰囲気の世界中に中継されることが、大会の価値を高める重要な要素の一つになると考えます。試合後のインタビュアーや記者会見の仕切りも同様です。スムーズに行えるように細心の注意を払い、あらゆる場面を想定して、なにか起きても対応できるように準備するのです。

「大会中、特に印象的だったことはありますか。」

岩元 韓国人選手が記者会見をする時に同時通訳のシステムが作動しなくなったことがありました。この時、司会をして同僚のスイス人のメディアオフィサーは、とっさの判断で、自分が通訳することを決めたのです。韓国人選手も、英語の質問には英語で対応し、韓国チームのメディアオフィサーもそれをサポート。英語・ドイツ語・韓国語のリレーで、記者会見は無事に終了しました。司会者の判断力と対応力も素晴らしいし、それに応じた韓国人選手も素晴らしい。選

手も、広報も、ここには世界中からプロ中のプロが集まっているということを変更して感じました。

「大変だったことは？」

岩元 試合直後のTVインタビューで選手の選手にするかが決まるのは試合終了直前。試合終了の笛と同時に選手をインタビュアーの場所まで連れて行かなければならないのは大変でした。いやがる選手に突きとばされたこともあります。でもこちらから引き下がるわけにはいけません。まさに真剣勝負、戦場さながらでしたね。

「ブラジル大会のメディアオフィサーは世界から選ばれた43人。その中で日本人はただ一人、しかも日本から女性選ばれたのは初めてだったそうですね。」

岩元 サッカーに関わる者にとって、ワールドカップは最高峰の大会。そこで主催者側の人間として広報を担当することは大きな目標でした。世界中から集まった広報のプロが、急ごしらえのチームで自分の知識と経験をもとに、組織をまとめながら一カ月間仕事をするというところに大きな魅力を感じていたので、決まったときは本当に嬉しかったですね。

人とのつながりを大切にしています

「目標を達成するまでの道のりはどの

ようなものだったのですか？」

岩元 学生時代、京都パープルサンガ（当時）でアルバイトをしてプロサッカークラブで働く面白さを知り、大学卒業後、正社員となったのがキャリアの始まりです。1998年のワールドカップフランス大会を観戦して、その素晴らしい雰囲気魅了され「2002年のワールドカップ日韓大会にどんな形でもいにか関わりたい」という目標を立てました。そのため会場予定地のひとつだった神戸のクラブ（ヴィッセル神戸）へ移り、結果として組織委員会の立場で大会に関わることができました。この時に世界基準の広報のあり方を知ったことから、「いつの日かFIFAメディアオフィサーになる」が、次の目標になったのです。

2007年、女子ワールドカップ中国大会で初めてその目標は達成したものの、周囲の人のレベルの高さに圧倒され、叱られてばかりでなにもできなかった私は、その後しばらく、FIFAから声がかかなくなりました。そこで次の目標を「もっと力をつけて、コンスタントにオフアワーが来るようにする」と定めて努力を重ねた結果、女子や育成年代のいくつかの大会での任務を経て、ようやくワールドカップに手が届いたというところです。

「仕事で大切にしていることは何です

か？」

岩元 人とのつながりですね。仕事って結局「人」だと思っんです。「あの人になら頼みたい」と思ってもらえるように、一期一会を大切に、また、地元鹿児島に伝わる言葉「泣くよつこひつ飛べ」迷って泣くくらいなら思い切って飛べ」の精神で何事にも常に前向きにチャレンジしていきたいと思います。実は、夫が同業者なので、悩んだり迷ったときは話を聞いてもらったりしています。彼も同僚社卒業生。結婚式はクラーク記念館で挙げたんですよ。

「今後、どのような仕事をしたいと考えていますか。」

岩元 すでに1月のアジアカップ、6月の女子ワールドカップなどの仕事は決まっています。一方で、昨年、初めて卓球の世界選手権東京大会で、組織委員会の広報統括を務めました。メディア対応など、サッカーの経験を生かせることが色々あって、とても楽しく、また、新たな発見や学びもたくさんありました。

将来的には、世界のどこでも求められる「スポーツ広報界の日本代表」になりたいですね。スポーツは世界をつなぐかけ橋です。裏方ではありますが、多くの若い人が、スポーツ界で活躍してほしいと願っています。（2014年12月3日）